

「社会福祉法人 創思苑」（創思苑と略す）は1992年に設立された社会福祉法人である。知的障害のある人たちが「どんなに障害が重くても地域で普通に暮らす」ことを支援するため、東大阪市を中心に3つの拠点と27のグループホームを運営している。グループホームには、障害のある人たち85名が暮らしている（図1）。

創思苑では、アメリカで始まったピープルファースト運動との出会いを通して、障害のある人たちが「自分の意見を言っているんだ」ということに気づき、「自分らしく暮らしたい」という自己決定を実現している。それは、グループホームを基盤とした普通の暮らしであり、拠点の事業所に通うことで自分の役割や力、喜びを見出していく姿である。とくに、当事者自身が情報を発信するインターネット放送局「パンジーメディア」では当事者たちが活躍し、多くの人々の注目が集まっている。

今回は、3つの拠点事業所について伝え、グループホームでの暮らしの様子やパンジーメディアについて紹介する。



自分で決める！ 地域で暮らす！ を支援する  
「パンジー（社会福祉法人 創思苑）」  
(大阪府東大阪市)②

190

デンマーク&世界の  
地域居住 **エイジング・イン・プレイス**

Ageing in Place

松岡 洋子 (東京家政大学大学院 客員教授)



写真1 クリエイティブハウス パンジー (写真提供・社会福祉法人 創思苑)

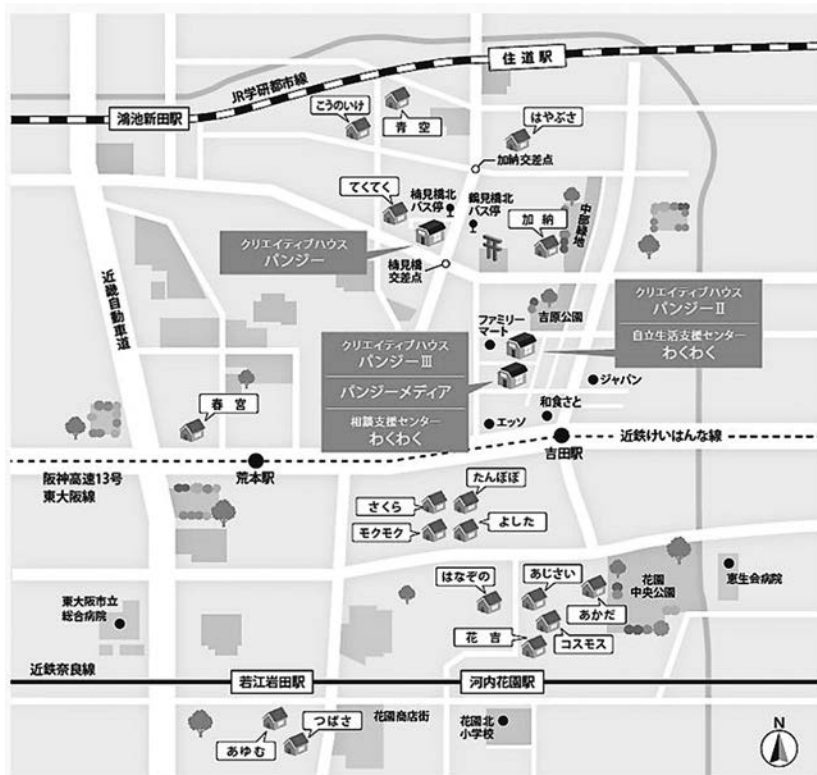
3つの拠点事業所は活動の場。グループホームや自宅で暮らしながら、ここに通う

創思苑には、3つの拠点がある。

まず、1993年にできたクリエイティブハウスパンジー（生活介護30名、パンジーと略す）は民家風のおしゃれな建物で、住道駅（JR学研都市線）の近くにある（写真1）。入り

図1 社会福祉法人 創思苑の活動拠点

(イラスト提供・社会福祉法人 創思苑)



口は自動ドアで鍵がなく、入ってすぐに天井の高い吹き抜けのデイルームがある。入り口には鍵もなく、受付もなく、地域の人が自然に出入りでき、利用者にも開放的な空間である。

入り口右手には、無添加パンの広い工房があり、立派な業務用オープンが数台置かれていた(写真2)。これが、1989年から取り組んできたパンづくりの現場である。訪問した金曜日は作業

がお休みであったため作業風景が写せなかったが、保育所からの給食用パンの注文を受け、学校やパナソニックなどの企業にも販売に出かけている。600個の大口の注文が入る時もあるが、その時には「この注文を受けるか」をみんなで相談して決める。そして、力を合わせて取り組んで、心地よい疲労感に浸ること

であった。

ユニフォームは白色を基調にしたものから、茶色のかわいいデザインに変更したばかりである。また、「無添加」をテーマとして国産小麦粉にこだわってきたが、令和7年度からは米粉のパンに切り替える予定である。みんなで話し合い、常にリフレッシュしている様子が伺える。

パンジーでは軽作業も行っており、ガラス窓越しに見える小さな庭の奥にそのスペースがある。ここでは、スキルを身につけるといふよりは、その人なりの関わり方を見つけて一緒に作業ができるような関係づくりを目指



写真2 クリエイティブハウスパンジーのパン工房



写真3 パンジーメディア  
(写真提供・社会福祉法人 創思苑)



写真4 クリエイティブハウスパンジーⅢ  
(写真提供・社会福祉法人 創思苑)

している。強度行動障害のある当事者も、時間をかけてハンガーの組み立てなどの仕事ができるようになっていく。白い無機質な壁に

囲まれた施設風ではなく、コンクリート打ち放しのおしゃれ感がある空間は居心地のよい空間であった。

2000年にオープンしたパンジーⅡ（生活介護30名）は、消防署やマンションの清掃の仕事、弁当の配達、作業などに取り組んでおり、自立生活支援センター（居宅介護、重度訪問、行動援護、同行援護、移動支援）が併設されている。

この他に、2009年にできたパンジーⅢ（生活介護30名）があり、当事者による情報発信拠点「パンジーメディア」はパンジーⅢに隣接している（写真3・写真4）。当事者たちは、グループホームや自宅で暮らしながら、こうした事業所に通っている。

グループホームでの暮らしは、助け合いながら、「自分でできることは自分でする」が基本

創思苑のグループホーム（共同生活援助）は27カ所あり、定員は85名である。一戸の住宅に3人前後が住んでおり、戸建て住宅を中心に府営住宅を活用したものもある。その

他、香川県高松市には2023年に古民家を改築してできた「自立ホームきぼう」があり、ここでは5人の仲間と一緒に暮らしている。

グループホームでは、生活のさまざまな側面で自分でできることは自分で行い、それが難しい人や難しい部分については介護者に手伝ってもらおう。介護者は各グループホームに固定ではなく、複数のグループホームで担当が決められている。現在、定員85名に対し、おおよそ110名の配置となっている（注1）。

生活の様子を紹介しよう。朝食と夕食はグループホームでとり、昼食は先ほど紹介した事業所ですべてしている。平日の夕食は介護者が準備することが多いが、休日には仲間同士で買物に行き、一緒に作ることもある（写真5）。

休日などの自分の時間には、テレビを見た後、音楽を聴いたり、買物に行ったりして過ごすことが多い。当然のことであるが、仲間のグループホームを訪問することもある。いざれにしても、施設ではできなかった自由な暮らしであり、普通の暮らしである。

また、突発的に周囲の人の髪をつかんで離



写真5 創思苑グループホームの暮らし  
(社会福祉法人 創思苑のホームページより)

することができなかつた人も、グループホームに住んで徐々に落ち着いて生活できるようになっている。その行動がどのような時に、なぜ起きるのかを見極めることで解決の糸口がつかめる。ある当事者には「大丈夫？」と声をかけると落ち着くことがわかり、不安な気持ちや背景にあることがわかった。そこで、知恵を出し合って、落ち着いて暮らせる環境を作っていた。

グループホームでは、家賃や光熱費、食費は自分で払わなければならないが、障害者年金や生活保護、作業で得られた収入で、自立した自分らしい生活を実現している。

創思苑のグループホームには、車椅子の人も、障害の重い人も、結婚している人も住んでいる。そして利用者による自治会があり、住宅のことや生活についてのルールを決め、改善してほしいことがあれば、この自治会を通して法人に要求を伝えている。利用者は生活する主体であり、決して単なるサービスの受け手ではないのである。

### インターネット放送で始まった「私の歴史」。

### 自分の語りを通して、自分自身を再構築していく

2025年1月の訪問日に、林淑美理事長は当事者の人たち6人と話をする場を準備してくださっていた。

創思苑では、差別や偏見を乗り越えてきた当事者たちの一人ひとりの歴史に着目して、各自の語りをインターネット放送局「パンジーメディア」の『きぼうのつばさ』とい

う番組で放送し、それをDVDと書籍にまとめている(注2)。訪問日に聞いた話を中心に、この書籍を参考にしながら紹介していく。

野村信久さん(写真6)は33歳の時から8年間施設で暮らし、41歳でパンジーを利用するようになった。施設での暮らしはルールが厳しく、生活時間も決められて外に出ることもできなかった。敷地内に作業棟があって昼間はそこで作業するが、自由な買物といえば作業が終わった後の100円のコーラくらいだった。今の楽しみは、音楽を聴いたり好きなスポーツメーカーの靴を自分で選んで買ったりすることである。



写真6 野村信久さん  
(パンジーメディア『きぼうのつばさ』より)



写真7 中山千秋さん  
(パンジーメディア『きぼうのつばさ』より)

小学5年生の時に母親を亡くした中山千秋さん(写真7)は、パンジーで野村さんと出会って、40



写真8 梅原義教さん  
(パンジーメディア「きぼうのつばさ」より)

歳の時に結婚した。中山さんは中学2年から高校まで養護学級で過ごしたが、ばかにされたりいじめられたりし、22歳で入所した施設では厳しい規則を守れないと殴られたりした。そこで、24歳で施設を出た。30歳を過ぎて、「このままではあかん」と思って仕事を探そうちに、診療所の先生に作業所を勧められてパンジーと出会った。パンジーでは当事者と支援者の壁がなく、これまであきらめていたことをやりたいと思うようになった。今は、パートナーの野村さんとグループホームで暮らし、毎年の結婚記念日の夫婦旅行を楽しみにしている。中山さんは、梅原義教さんが話す時にわかりやすく通訳して、私を大いに助けてくださった。中山さんは現在、ピープルファーストジャパンの副代表である。

梅原さん(写真8)は、身体の筋肉に緊張があり、4歳から12歳まで施設で暮らした。「施設では毎日訓練で、朝は6時半に起きて夜8時

には寝る。しんどかったです」と言う。しかし、頑張る力の源は「歩けるようになってほしい」というお母さんの願いであった。日曜日から11日間施設で訓練して、翌週の木曜日から土曜日の3日間は実家で過ごす生活の繰り返しだった。施設に帰る時には父親が送ってくれる車の中で「お母さんに会えなくなる」と泣いていたそうである。夜に寝ている時、トイレに行けないために布団の中でもらしてしまふとひどく叱られ、悔しい思いもした。梅原さんも、今はグループホームで暮らしている。浅野真岳さん(写真9)は香川県生まれで、高松市にあるパンジーVからやってきた。自閉症の診断を受けているが知的障害ではなく、小中学校は普通学級に通い、岡山県の全寮制の高校に進んだ。まわりから理解されにくい障害で、薬のコントロールがうまくいかない入院となり、入退院を繰り返しながらパン屋(就労支援B)で5年間働いた。コロナ禍の



写真9 浅野真岳さん  
(パンジーメディア「きぼうのつばさ」より)



写真10 辰巳正一さん  
(パンジーメディア「きぼうのつばさ」より)

中で入院が長引き、大阪のパンジーに来ることになった。音楽が好きで、打楽器やギターの演奏が得意で、ピートルズをこよなく愛している。「パンの生地は生き物なので、成長する感じが楽しみ」という浅野さん。今は、パンジーでのパン作りにやりがいを感じ、ピープルファーストの活動やパンジーメディアの仕事に「やりたいことができる」喜びを感じている。辰巳正一さん(写真10)は、小学校3年生から養護学級に入り、中学を卒業して鉄工所で働いた。しかし、仕事がきつくて4カ月で辞めてしまった。次に勤めた段ボール製品の会社では、カッコよく働く先輩の姿を見て頑張ろうという気持ちになり、9年間働いた。しかし、「仕事に行ったら辞めさせられるのでは」という不安と焦りの気持ちが強く、24歳の時から14年間引きこもり生活をするようになる。39歳の時に知人に勧められてパンジーと出会い、グループホームで暮らすようになった。

た。不安であっても安心できるのは、「いつでもおまえの心の中にいてくれるから、寂しくなったらまぶたを閉じ」というお母さんの言葉があるからである。辰巳さんは「パンジメディア」のキャスターを務め、NHKEテレの『Lolita (トイトイ)』(注3)という番組にも出演している。

山田浩さん(写真11)は小学3年生の時に養護学級に入り、中学校と高校は特別支援学校に通った。卒業後は洗濯の会社で働いたが5カ月で辞め、施設入所の経験を経て作業所に5年通い、その後、引きこもりが始まった。28歳の時にパンジーに通うようになり、当事者の気持ちをおまわってくれる支援者がいて、仲間もいる点が気に入っている。32歳の時、親から自立してグループホームで暮らし、パンジメディアの技術スタッフとして活動している。山田さんは、43歳の時に父親を亡くした。その時、大きなショックを受けたが、仲間のみんなが「大丈夫？」と励ましてくれたことで元気になれたという。山田さんは映画『大空へはばたこう』ではナレーターを務め、チラシの表紙を飾っている。2019年



写真11 山田浩さん  
(映画『大空へはばたこう』のチラシより)

ることである。

さまざまな「私の歴史」を紹介したが、みなさん不安と戦いながら、差別や排除を乗り越えてきた人たちである。仲間の話を真剣に聞きながら「たいへんやったなあ」と共感し、自分の歴史と重ね合わせているようであった。そうしたパンジーの仲間たちが、「パンジメディア」を通してメッセージを発信している。

### 「パンジメディア」は当事者の表現の場。

知的障害を持つ人を広く社会に知ってもらう

「パンジメディア」は、当事者がインターネット番組を制作して情報発信する放送局である(2016年9月スタート)。ドキュメンタリー映画の製作や上映活動、書籍・DVD

にはヒマラヤ登山に挑戦した。今の希望は、グループホームを出てアパートで一人暮らしをす

Dの出版もしており、筆者が創思苑と出会うきっかけとなった映画『大空へはばたこう』も「パンジメディア」で製作されたものである。ドキュメンタリー映画4本、書籍5冊あり、知的障害を持つ人たちのことを広く社会に情報発信している。

インターネット番組は『きぼうのつばさ』という名前で、これが非常に面白い。新聞やテレビ(NHK)で取り上げられることも多く、キャスターを務める辰巳正一さんや中谷理佳さん、福田直美さんは、業界ではちょっとした有名人である。

『きぼうのつばさ』は毎月の配信で、第103回(2025年3月)を迎えている。制作は当事者たちであり、プロデューサーは映画監督の小川道幸さん。内容は、特集番組、パンジキッチン、私の歴史などである。

パンジキッチンでは、絵本『ぐりとぐら』のホットケーキを作る、野村信久さんがいつもパートナーに作ってあげているサンドイッチの作り方を披露するなど、あくまでも当事者が主役である。

最初のきっかけは、理事長の林さんが「テレビ局作れない？」と小川道幸さんに持ちかけたことであった。小川さんは、テレビ局はできなくてもインターネットを通じての情報発信はできると考え、パンジーの仲間に説明して一緒に作っていくこととなった。カメラの使い方の練習から始めたが、なかなかうまくいかない。しかし、大事なのは自分の思いや感じたことを発信することである。そこで、最初に「自分の感じた春」をテーマに当事者たちに表現してもらって、カメラに収めた。

内容についても勝手に決めるのではなく、みんなに応募してもらったところ、32のテーマが集まった。その中から「新聞ニュース」「私の歴史」「料理番組」「ドラマ」「パンジーの部屋(対談)」の5つが選ばれ、『きぼうのつばさ』は第103回まで育っているのである。

今回、創思苑を訪問し、知的障害を持つ人たちと話して、とても楽しく過ごすことができた。仲間同士で冗談を言って笑ったり、お互いによく知っているからこそそのツッコミをしたりする中に入れてもらったわけである。

高齢者福祉の研究をしているとはいえ、障害を持つ人との交流はほとんどない。正直なところ、うまくコミュニケーションできるだろうか、という不安があった。が、中山さんが梅原さんをしつかりと見て、真剣な表情で私には聞き取りにくい会話の内容をわかりやすく伝えてくださった。その目の輝きに驚いて、深い優しさや強い仲間意識を感じながら、親しみを感じて輪の中に入っていったように思う。

入所施設の経験や引きこもりを乗り越えて、グループホームで暮らしながら、自分の感じたことを表現し、自分の意見や決定を主張しながら生きている姿には、理事長である林さんの「安心できる環境で仲間や信頼できる人がいれば、人はいつでも変わることができる」「どんなに障害が重くても地域で暮らすことを支える」という信念が重なって見えてくる。

今回はパンジーメディアについて紹介したが、このほかにもエベレスト登山への挑戦、農薬も肥料も使わない「菌ちゃん農法」、訪問時には知的障害を持つ人の選挙権行使についての勉強会を行っていた。飽くなき挑戦を続けているが、それを当事者のみなさんが楽

しんでいるのがうまくいく秘訣のように思う。なぜなら、きっかけは理事長であっても、当事者たちが理解して、決定して、実行する過程を大事にしているからだだろう。

みなさんも是非、『きぼうのつばさ』(<https://pansymedia.com>)を観てみてください。そして、映画『天空へはばたこう』の上映会を開催してみてください(連絡先:072-968-7151)。

(注1) 共同生活援助は、介護サービス包括型、外部サービス利用型、日中サービス支援型の3種がある。創思苑では、介護サービス包括型を採用している。人員配置は、利用者の障害支援区分によっても異なるため柔軟に対応する必要があり、明確に規定するのが難しい状況である。

(注2) 社会福祉法人創思苑『DVD BO OK 私の歴史スペシャル』

(注3) NHK Eテレの「生きづらさを抱えるすべてのマイノリティ」ととってのバリアをなくすバラエティ番組『バリバラ』が終了し、『to:to』はその後継番組である。